

社長メッセージ



日本赤十字社
社長 清家 篤

2020年初頭から猛威を振るったCOVID-19の影響は、度重なる緊急事態宣言の発出や東京オリンピックの延期など私たちの生活に大きな影響を与え、今なおその影響は続いています。この間、全国の赤十字施設においては、これまで経験したことのない医療提供体制を維持し、さらにワクチン接種への協力など、地域の医療を守るために大きな役割を果たしています。これを可能にした職員各位の御貢献に、心から敬意を表し、また日本赤十字社を代表して厚く御礼申し上げます。

こうしたなか、本学会も昨年、一昨年は中止せざるを得ない状況となりましたが、このたび「北の大地から発信する共生・協調・協働の未来」をテーマとして、集合形式により第58回日本赤十字社医学会総会が旭川市で開催されることになりました。これも本医学会総会の開催にあたり用意周到に準備に臨まれた、牧野院長をはじめ、旭川赤十字病院のスタッフの皆さんの御尽力の賜物と思います。

私たちはこの間の厳しい状況の中から、医療についていくつかのことを再確認したと思います。一つはいうまでもなく医療従事者の皆様方の大切さです。ここまで何とか乗り切ってきたのは、高い志と能力を持った医療従事者の方々のお蔭であることは明らかです。であるからこそ、その医療従事者自身の安全・健康を守り、またその疲労をできるだけ軽減できるような方策は不可欠であり、その意味で医療従事者の働き方改革は次の危機に向けても待ったなしの課題であります。

二つめは地域の医療体制整備の重要性です。急性期と回復期の医療提供体制の役割分担と地域における、いわゆるかかりつけ医機能強化は、もともと中長期的な医療・介護提供体制改革の中心課題でもありましたが、これらのことは緊急課題、重要課題となりました。

緊急事態下で生じた課題は、これからも人々の命を守る医療現場を支えていくために、医療提供のあり方を見つめ直していかなければならないことを教えてくれているわけです。医療スタッフや病床など限られた医療資源を有効に活用していくために、ICTやタスクシフト・タスクシェアの手法を取り入れるなど、業務自体の見直しや効率化について、各地の日赤医療施設で日々検討されていることは大変に心強いところであり、好事例の情報共有も大切です。

さらにこの間の経験で改めて確認されたことの三つめは、科学研究の重要性です。当初は未知の病であったものも、それほど期間を置かずに病態は解明され、治療方法も徐々に確立され、そしてなによりもこれまでに例のないほど速やかにワクチンも開発されました。私たちは科学的研究の威力を改めて目の当たりにしたところであり、医学、科学研究をさらに進める方策を講じることの必要性を示しています。

これら三つのことは国民の命を守る医療を維持・向上させていくためには、どれもきわめて大切な点であり、そのことを私たちはこの短期間の経験を通じ再確認したわけです。具体的には、医療の提供体制の見直しを、科学技術の進歩の力も借りつつ、しっかりと進めて行くということでしょう。政策的としては、「地域医療構想」「医療従事者の働き方改革」「医師偏在対策」などと呼ばれているものになります。そうした観点から、今回のメインテーマとなっている「共生・協調・協働の未来」に向け、赤十字職員として闊達な議論を交して頂くことで、実りある2日間の医学会総会となることを期待しています。